

# 奈文研

## ニュース

No.23

Dec.2006

NABUNKEN NEWS



独立行政法人 文化財研究所  
奈良文化財研究所  
〒630-8577奈良市二条町2丁目9-1  
<http://www.nabunken.jp/>

### 西大寺食堂院の井戸

西大寺は、奈良時代後半に造営された寺院で、その規模は東大寺にも匹敵したとされています。都城発掘調査部では、今年5月から約半年間、西大寺食堂院跡推定地の発掘調査をおこないました。その結果、これまでまとまった資料のなかった西大寺食堂院の中核部の遺構を検出し、古代寺院の謎を解明するための手がかりを得ることができました。

注目される遺構は、巨大な井籠組の井戸です。この井戸は食堂院の台所である大炊殿せいりくみの南東に位置します。大きさは内法2.3m以上あり、これまで平城京で検出された井戸で最大の規模を誇ります。

井戸枠は5段分、合計20枚が残り、大きいものは長さ約260cm、幅約60cmもあります。表面にはチョウナやヤリガンナなどの加工痕がみえます。また、年輪年代測定の結果、767年に伐採された部材が含まれていることがわかりました。『続日本紀』によると、この年に造西大寺司が任命されており、これらの木材は西大寺造営に伴い用意されたものと考えられます。

発掘調査中、井戸の埋土に多くの遺物が含まれていることがわかり、土ごとコンテナに入れて研究所に持ち帰り、遺物の洗浄・整理作業をおこなうこと

になりました。コンテナの数は1000箱以上。作業が終わるまで1年以上かかるとみられます。

埋土からは木簡をはじめ、土器、瓦、木製品、植物など多種多様な遺物が出土しています。主な遺物として、食堂院の機能や運営をうかがわせる木簡や、正倉院に伝わるものとそっくりな奈良三彩、多量の製塩土器、奈良時代後半の軒瓦、箸や杓子といった食器などがあり、きわめて食堂院らしい遺物といえるでしょう。そのほか、「栗」「瓜」「米」といった具体的な食品名が書かれた木簡とともに、実際に栗の皮や瓜の種などが出土しています。当時の西大寺僧の食生活の様子が目に浮かぶようです。

このように、今回検出した井戸は西大寺食堂院の姿を目の当たりにさせるだけでなく、古代の技術や寺院経済、寺内組織などを考える上で、きわめて貴重な資料といえます。さらに、これらの資料が発掘調査による出土品である点は大変意義深く、文献資料に乏しい古代西大寺史研究を、確実に進展させるものとして期待されます。

今回の発掘調査の概要と、井戸から出土した遺物の一部は、11月21日から平城宮跡資料館で展示しています。ぜひ、多くの方に最新の発掘の成果をご覧くださいと思います。

(都城発掘調査部 大林 潤)



井戸検出状況(南西から)



洗いを待つ井戸の土たち

## 発掘調査の概要

### 西大寺食堂院などの調査(平成第410次)

巻頭で紹介した第404次調査に続き、その北側を第410次調査として発掘しました。7月末から調査に入り、10月半ばに終了しました。

西大寺食堂院では、大炊殿の全貌を解明したほか、その北側で甲双倉・北門を検出しました。大炊殿は、建物規模東西27m(7間)南北15m(4間)の巨大な礎石建ち建物です。礎石は坪掘地業を施し据えます。坪掘地業は、一辺約1.5mの方形の穴を掘り、途中瓦層を混ぜながら版築状に土を積みます。礎石がのるはずの穴の中心付近には、拳大から人頭大の石をいれつつ、土を積みます。分業化して組織的で迅速な造営の中で、工事の水準を維持する工夫だったのかも知れません。周辺から鬼瓦も出土しました。大炊殿の屋根を飾っていたのでしょうか。

大炊殿の規模が確定し、甲双倉・北門が見つかったことで、食堂院の建物配置が明らかになってきました。食堂・檜皮殿・大炊殿が南北に並びます。その北に甲双倉・北門があり、檜皮殿と大炊殿の間には巨大な井戸があります(井戸については巻頭記事参照)。大炊殿の東西に檜皮厨が、厨の北にそれぞれ倉代があったようです。第404次調査でも検出した埋甕遺構は、厨と関連する施設でしょうか。極めて計画的な建物配置です。

こうした建物配置からは、食堂院の中が、食堂を中心とする儀式的な「堂」の空間と、それを支える背後の実務的な空間に分かれていた様相がみてとれます。古代寺院の食堂院の全貌が、ここまで具体的に明らかになった例は希有といえます。

西大寺食堂院の北側では、一条北大路南側溝を確認しました。幅は約3.5～4m、残存する深さは約0.7mです。水流もあったようです。北側溝は確定できませんでした。

北辺坊では溝や柱列を確認しました。奈良時代前半から活発な土地利用がなされていました。

10月7日に現地説明会をおこない、約900人ものご来場をいただきました。

また調査中、騒音・埃など、周辺の方々には多くのご迷惑・ご負担をおかけ致しました。住民の皆様のご協力に、心より感謝申し上げる次第です。

(都城発掘調査部 馬場 基)



調査区全景(南から)



一条北大路南側溝(北東から)



大炊殿坪掘地業の様子

**藤原宮朝堂院東第四堂の調査(飛鳥藤原第144次)**

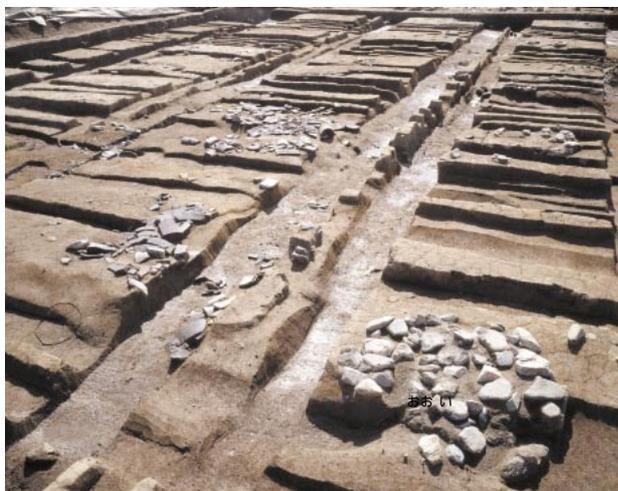
4月から10月にかけて、藤原宮朝堂院東第四堂の建物と、その周辺の様子を明らかにする調査をおこないました。春(第142次)は建物の南半分を、夏は北半分を調査しましたが、北半分の残りが比較的良好で、多くの新知見が得られました。

最大の成果は、建物規模が予想していたよりも大きかったことです。東第四堂は、日本古文化研究所が戦前におこなった部分調査によって、東西4間・南北15間の規模に復原されていました。今回、東側にもう1間分伸ばした位置で、礎石を据えるための穴(礎石据付掘形)を3基確認したため、東西5間の規模であることがわかりました。

しかし、「東第四堂の規模は、東西5間 南北15間だった」と簡単には言い切れません。調査区の中で、後世の削平をほとんど受けていない部分がわずかに残っていましたが、そこでは東西4間分の基壇の高まりが確認されたのです。また、その高まりの外側には、東第四堂を解体した際に捨てたとみられる瓦が厚く堆積していました。

この状況は、建物の解体時、すなわち藤原宮から平城宮へ遷都する直前には、東西規模が4間であったことを示しています。すると、東第四堂は当初、東西5間・南北15間で、途中で東西のみ4間に縮められたこととなります。

この規模の縮小が、第四堂建設前の「計画変更」か、それとも「建て替え」によるものかは重要な問題です。しかし、東西規模を5間から4間の建物に建て替えるのは、屋根をいったんはずさなければならない大工事であること、さらに建て替え時の廃棄瓦が認められないことなどから、調査員の所見は、5間分の



「5間目」の礎石据付掘形(右下・北西から)

礎石据付掘形を掘った時点での「計画変更」説に傾きかけました。

ところが、調査も終盤にさしかかった頃、東西5間分の外側で、足場の痕跡(小穴)が検出されたのです。足場は、柱を立てる時や降ろす時に組まれるものですから、東第四堂は東西5間の規模でも柱が立っていた可能性が高まりました。

このように大きく解釈が揺れ動いた調査になりましたが、「建て替え」となると藤原宮朝堂院全体の問題です。今後、一層慎重に検討を進めたいと考えています。(都城発掘調査部 中川 あや)

**飛鳥寺講堂の調査(飛鳥藤原第143・6次)**

飛鳥寺中金堂の北方、来迎寺の塀新設に伴い講堂の西南隅を調査しました。講堂は50年前の調査で、桁行8間、梁行4間の四面廂付東西棟礎石建物で、玉石積みによる基壇外装をもち、周囲に玉石組の雨落溝があることがわかっています。

今回の調査では、南側柱の礎石を新たに3個検出し、以前確認していた1個も含め、調査区内にL字形に4個並んでいます。礎石の大きさは1.5mほどあり、径約80cmの柱座があります。柱間は、身舎部分で4.5m、廂部分では3.85mです。また、礎石据付掘形なども検出し、基壇の詳細な状況が明らかになりました。

中金堂に飛鳥大仏が安置されてから1400年、最初の調査で舍利埋納物が出土してから50年目にこのような壮大な遺構が姿を現したことは、感慨深いものがあります。一般の人の関心も高く、3日間の現場公開で約2100人が見学に訪れました。

(都城発掘調査部 玉田 芳英)



検出した大型礎石(西から)



### キトラ古墳の玄武

1983年、3万画素のファイバースコープでとらえられ、キトラ古墳壁画発見の発端となった玄武です。2005年11月に保存修復のため石室北壁から取り外されましたが、2007年5月11日から27日に飛鳥資料館で特別公開されます。

西壁側にすすむ亀に蛇が巻き付き、甲羅の上で振り返る亀と蛇がにらみあいます。蛇は亀の体を斜めにひと巻きして、頭側と尻尾側を大きくそり上げるとともに、尻尾でつくったループに頭を通し、環状を呈しています。亀には耳がついています。この構図の玄武は、東晋隆安2年(398)の江蘇省鎮江畜牧場二七大隊墓の壁画あたりに祖形を求められそうです。大陸では類例が少ないのに対し、高松塚壁画、薬師寺金堂薬師如来坐像台座、正倉院十二支八卦背円鏡など、飛鳥～奈良時代の日本に類例が多いのも特徴です。幅23cm×高さ14cm。(写真下は原寸大)

(飛鳥資料館 加藤 真二)



## ✿ 遼寧省文物考古研究所との友好共同研究10年と『東アジア考古学論叢』の刊行

奈良文化財研究所と中国遼寧省文物考古研究所とが友好共同研究を開始してから、2005年でちょうど10年が経過したところです。1996年に「東アジアにおける古代都城遺跡と保存に関する研究 - 三燕都城等出土の鉄器及びその他金属器の保存研究」として友好共同研究協定書を交わして着手したのが始まりでした。2001年にはそれまでの研究をさらに発展させるべく、「3 - 6世紀日中古代遺跡出土遺物の比較研究」の協定書を締結して、昨年度まで研究を継続してきました。今年度からは、「朝陽地区隋唐墓の整理と研究」という協定書を取り結び、新たな共同研究に取り組み始めました。

昨年度までは、特に三燕文化の文物について調査研究を実施してきました。三燕とは、遼寧省西部の朝陽地方を中心として4世紀中頃から5世紀中頃にかけて、慕容鮮卑<sup>ぼつようせんび</sup>という部族が建てた「前燕」「後燕」「北燕」の三国を合わせた呼称です。朝陽市にはこれらの国の都が置かれた「竜城」跡があります。この時期にこの部族が残した文物を主として三燕文化と呼んでいます。この時期はちょうど日本の古墳時代に相当し、韓半島との関連性とも相まって、近年資料の増加著しい三燕文化文物は日本の古墳時代研究者の関心を集め、重要視されるようになってきました。こうしたなかで、2002年には『三燕文物精粹』中国版を、2004年度には同書の日本語版を共同研究の成果として公刊することができました。この図録には北燕の「馮素弗墓<sup>ひょうそふつ</sup>」や一大墓葬群で著名な「喇嘛洞墓地<sup>らまどう</sup>」などの重要な文物の図版が収められており、国内外の研究者から注目されています。

共同研究は主として、瀋陽市にある遼寧省文物考古研究所の一室をお借りし、出土品を実際に手にとって観察をおこない、実測して記録するという地道な考古学的調査を積み重ねてきました。出土品の写真撮影は膨大な量にのぼりますが、文物考古研究所の撮影室で奈文研と文物考古研究所の両研究所のカメラマンが協力しておこなってきました。調査対象となった出土品は、北票喇嘛洞墓地出土品をはじめとして、北票房身墓、十二台郷磚廠88M1、朝陽袁台子壁画墓、朝陽後燕崔遙墓、北票北燕馮素弗墓な

ど特に重要な墓葬のほか、北票倉糧窖墓、奉車都尉墓、甜草溝晋墓など多数に及んでいます。調査の進捗に伴い、文物考古研究所以外に所蔵されている出土品について調査が必要となり、それを研究所まで運んでいただくなど、関係する各機関のご協力もいただきました。考古学的な調査のほかに、蛍光X線分析などの理化学的調査を実施して材質鑑定や装飾技法の解明などを進めてきました。

こうした調査と並行して、文物考古研究所の研究者をはじめとして省や地方の文化庁など文化財関係機関の方々を日本に招聘して、各地の遺跡や遺物など、多数の文化財や発掘調査の現場などを参観し、我が国の文化財の調査研究、保存、活用の実態に接していただきました。中国の研究者の方々は、文物考古研究所で私たちの考古学的調査や写真撮影を通じて、日本的な調査方法の一端に触れていましたが、日本での実態を目の当たりにして、日本の考古学研究や発掘調査、文化財の保存、大規模遺跡の保護・活用などについてさらに理解を深めていただけました。また、招聘の際には、奈文研などで講演をお願いし、第一線の研究成果をご紹介いただきました。

こうした長年にわたる友好共同研究の成果の一端として、今年3月に『東アジア考古学論叢』を公刊しました。三燕文化を主軸として東アジア全体に視野を広げた、日中双方の研究者による共同研究論文集です。これも先の『三燕文物精粹』と同様に、研究者の注目するところとなっています。この論文集の刊行は、10年間の共同研究に一区切りをつけ、新たな段階へと発展させる礎を築いたことの象徴と言えるでしょう。今後はさらに友好学術交流を深め、隋唐代研究に資するべくこの共同研究を進めていこうと思っています。(都城発掘調査部 小池 伸彦)



遼寧省文物考古研究所での調査(2005年6月)

## 遺跡・調査技術研究室の開設

遺跡・調査技術研究室は遺跡および文化財調査技術の研究を目的として、今年春から活動をはじめた研究室です。現在、考古学を専門とする2名の研究員と1名の客員研究員、そして1名の派遣職員で構成されています。

埋蔵文化財センターにかつて存在した遺跡調査技術研究室、遺物調査技術研究室、発掘技術研究室、測量研究室等の伝統を受け継ぎ、測量・計測についての研究、発掘技術の開発と普及、文化財探査手法の応用を主な課題として活動を開始しました。

これらの分野は、地理学、土木工学、物理学といった専門知識を必要としており、少数の研究者で全てを網羅することはほとんど不可能です。このため、各方面の専門家と連携をはかりながら研究を進めていく必要があります。

逆もまたしかり。得られた成果が一人歩きして歴史資料にいささか奇妙な解釈がおこなわれてしまうこともよくあります。このような問題に対しては専門外だからと全てをまかせきりにするのではなく、また成果を絶対と信じ込むことをいましめながら、常に意見の交換をおこなうことが不可欠であると思えます。

私達の最終的な目的は、遺跡の理解を通じて歴史研究を進めることにあります。他分野の専門家との連携をするときには、その目的をいかに伝え、得られた成果を評価していくのか、という橋渡しの役割が必要です。そのためにも考古学研究者としての視点を堅持しつつ、研究と連携を進めていきたいと考えています。

まだ生まれて間もない研究室ですが、現在までに



石仏の測量(笠置寺)

いくつかの試験的な研究を進めています。

測量機器の評価と活用の分野では、トータルステーションの効果的な活用方法の模索やGPSによる位置計測の検討、国内外の研究者に対する測量技術の研修をおこないました。

デジタル写真やレーザスキャナによる三次元計測としては、笠置山の石仏の試験的計測や中国の隋唐墓出土資料の計測をおこない、使用に際しての課題を明らかにすることができました。

遺跡における物理的手法を用いた文化財探査も、日本各地の文化財担当機関と連携しながら活発に進めています。11月末現在で岩手県から山口県まで、様々な対象と方法を用いた探査を実施しています。また、研究者を対象としたワークショップを通じて、理解を広める試みもおこないました。

加えて、得られた情報をいかに統合し、歴史資料として活用するのか、という課題に対応して、空間情報科学の積極的な活用と情報収集を進めています。

これらの試みは、まだ全て満足できる結果が出ているとはいえませんが、試行錯誤をくり返ししながら基礎的な研究を続行し、文化財の調査技術の向上に寄与していきたいと考えています。

また、埋蔵文化財センターの中核的な仕事のひとつである専門・一般研修や、文化庁の委託をうけて実施している『発掘調査のて引き』の編集事務局も担当しています。

今後、各地でおこなわれている発掘調査の実態を収集し、必要とされている技術の開発と普及をはかっていくことで、より多様な文化財の情報を引き出すお手伝いをしたいと考えています。今後の研究の進展にご期待ください。

(埋蔵文化財センター 金田 明大)



ワークショップの様子(平城宮東方官衙地区)

## 飛鳥資料館冬期企画展のご紹介

### 発掘調査速報展

#### 「飛鳥の考古学2006」

平成19年1月16日(火)~2月25日(日)

飛鳥地域では、高松塚古墳やキトラ古墳の調査が多くの人々の関心を集めていますが、近年、飛鳥京跡や石神遺跡などにおいても発掘調査が進み、注目すべき新事実の発見が続いています。

飛鳥京跡の内郭中枢では、巨大な正殿の北でもそれと同規模の建物遺構が発見され、中枢部の建物配置がほぼ確定しました。

石神遺跡では、「観世音経」と記された木簡が出土し、年号のあるものとしては最古のものとして重要な発見となりました。

また、昨年度では石舞台古墳の隣接地や、島庄遺跡、甘樫丘などの蘇我氏にかかわるとみられる調査がおこなわれ、大きな話題を呼びました。

飛鳥資料館では、こうした最新の発掘調査の内容を広くご紹介するため、このたび、「飛鳥の考古学2006」と題し、平成17年度の飛鳥地域の発掘調査速報展の開催を企画致しました。

本企画展では、当研究所および明日香村教育委員会の成果に加え、橿原考古学研究所、高取町教育委員会の協力の下、飛鳥京跡や観覚寺遺跡の発掘成果も交えて、飛鳥地域の貴重な資料を展示いたします。

なお、飛鳥資料館では毎年冬期こうした発掘調査速報展を開催することで、今後も飛鳥地域の発掘調査の最新情報をいち早く公開したいと考えています。  
(飛鳥資料館 清永 洋平)



石神遺跡出土人形

## 記 録

### 埋蔵文化財担当者研修

遺物観察調査課程

平成18年9月4日~9月29日 14名

遺跡地図情報課程

平成18年10月24日~27日 16名

自然科学的年代決定法課程

平成18年11月14日~17日 10名

古代集落遺跡調査課程

平成18年11月27日~12月1日 12名

中近世城郭調査課程

平成18年12月12日~19日 22名

### 発掘調査・現地説明会・現場公開

飛鳥藤原第142次・144次(藤原宮朝堂院東第四堂)の現地説明会

平成18年9月30日(土) 515名

平城第404・410次(西大寺旧境内食堂院跡及び北辺坊)の現地説明会

平成18年10月7日(土) 900名

飛鳥寺講堂跡の現場公開

平成18年11月14日(火)~16日(木) 2077名

平城第401次(平城宮跡東院地区)の現地説明会

平成18年12月9日(土) 445名

### 公開講演会

平成18年10月28日(土)午後1時30分~

於：平城宮跡資料館講堂

「明治・大正・昭和の住まいと文化財」

西田 紀子 都城発掘調査部研究員

「木簡調査の100年 - 全国出土木簡の追跡から」

山本 崇 都城発掘調査部研究員

### 飛鳥資料館秋期特別展示

展示 「飛鳥の金工 海獣葡萄鏡の諸相」

平成18年10月14日(土)~11月26日(日)

記念講演会

於：飛鳥資料館講堂

平成18年10月21日(土)

「海獣葡萄鏡について」

杉山 洋 飛鳥資料館学芸室長

平成18年10月28日(土)

「伯牙弹琴鏡 - 唐と日本で好まれた鏡 - 」

植松 勇介 國學院大學日本文化研究所

共同研究員

編集 「奈文研ニュース」編集委員会

発行 奈良文化財研究所 <http://www.nabunken.go.jp>

Eメール [jimu@nabunken.go.jp](mailto:jimu@nabunken.go.jp)

発行年月 2006年12月